

ハイスクールD×Dinガリィ

立花キャロル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦姫絶唱シンフォギアXVの7話にてガリィ・トゥーマーンはマスター、キャロル・マールス・デインハイムの復活を見届けその機能を停止した……

はずだった…

目次

青い人形

sideガリイ

「それですよマスター…私たちが欲しかったのは……」

自らのマスターたるキャロル・マールス・ディーンハイムの復活を見届け、

自動人形ガリイ・トゥーマーンの機能は停止した……

はずだった

不意に彼女は意識が覚醒する

「私は…」

ガリイが辺りを見渡すと周りには数名のローブ姿の人間がいた、

その人間達はガリイの起動に気づき

「成功だ!」「これで今まで我々を馬鹿にしてきたヤツらを!」

等と盛り上がっていたが、ガリイは周りの事など気にせず、なぜ停止したはずの自分が今こうして再起しているのか、マスターはあの後どうなったのかと考えていた。するとその時周りにいる人間達の内の一人が話しかけてきた

「おい、挨拶はどうした」

どうやらガリイに挨拶を要求しているらしい、だがガリイにはこいつに挨拶をする理由がない、考えを中断させられたガリイは

不機嫌な声で応える

「はあ?なんでガリイちゃんがアンタに挨拶しないといけないんですかあ?」

その言葉を聞いた人間は怒った口調でこう言ってきた

「な、何だと!?何だその口の利き方は!」

「なんでも何も、何で私がアンタに挨拶しなくちゃいけないんですかねえ?」

怒った口調で言ってきた人間に対しガリイも不機嫌な声で応える

更に怒った人間はこう言った

「わ、我々はお前を作つてやった創造主だぞ！創造物たるお前が挨拶するのは当たり前だろう!?」

創造主《マスター》その言葉を聞いたガリイの中で何か音が立てて

切れた

「分かつたらさっさと挨拶を…」

自らを創造主《マスター》と言つた人間に近づく

人間はまだ何か言つていたが関係ないどうせ何もわからなくなるのだから

「な、何だ、何をやる気だ?」

急に静かになり近づいてきたガリイに人間は狼狽える

「いえいえ♪挨拶をしろと言われたので挨拶をと思ひまして♪」

ガリイは笑いながらそういつた

ガリイのその言葉に人間は笑みを浮かべる

「何だやつと自分の立場が分かつたか、ならばさっさと…「チュツ♪」んむ!」

人間はまだ何か言つていたが聞く気は無いとばかりにキスをする

「な、何をしている!?!」

周りの人間はガリイが急にキスをした事に驚いらしい、だがガリイには

その言葉に応える義理は無いその人間の声を無視し引き続き思い出を吸い出しし続ける、時間が経つにつれてキスをされている人間は見る見る痩せていき最後に干からび事切れてしまった。

「ふう、ご馳走でした♪」

思い出を吸い出しきり自らを創造主と言つた愚か者を殺しガリイは満足そうに言つた。

周りの人間は最初は狼狽えていたが次第に状況を理解し周りの人間の内の一人がガリイに向かつて怒鳴つてきた、が

「きつ貴様、こんな事をしてただで済むと思うn」ザシユツ!

「ああ、そう言えばまだいたわねえ?」

その言葉はガリイの氷の剣で頭を貫かれる事で遮られる。

そして人間の死体をそのままに周りの人間達に尋ねる

「まだ、続けますかあ?」

人間達はガリイのその言葉に顔を引き攣らせ恐怖を隠しきれていなかったが、

「な、舐めるな!」

「わ、我らは一流の錬金術士だ、貴様のような不良品如きに殺されるかあ!」

このまま逃げるのはプライドが許さないらしくガリイと戦うことにしたらしい、ガリイはその人間達の様子を見て笑う嘲笑う

「そう、続けるのね…まあ、続けても続けなくても結果は分からないんですけどねえ♪」

そう、変わらない、愚かにも自らの創造主ガリイ マスターを名乗った時点でこれらの死という運命は変わらない

「ふ、ふざけるなあ!」

叫びながら、攻撃を始める周りの人間達、

「はん、聞かないわよ!」

それに対しガリイは障壁を展開し全ての攻撃を防ぐ

「この程度で、一流の錬金術なんて笑わせるわねえ♪」

「くっくソツ!」

半ばヤケクソで攻撃を続ける人間たち、しかし障壁に阻まれガリイには

傷1つつけられない

「ん〜こうしてるのも飽きてきたから、終わりにしちゃいませうかねえ♪」

そう言うとガリイは氷の剣を創り周りの人間の内の一人に一瞬で近づき首を跳ねる、首から溢れる血の噴水でガリイは紅く染まる

「さあ、次は誰ですかあ?」

「う、うわああああ!」

紅く染まりながら笑うガリイを見て恐怖が最高超になったのか人間達の内の一人が、逃げ出す。

「た、助けてくれえ!？」

「お、おい!？」

1人が逃げ出した事により統率が乱れ、周りいた他の人間達も恐怖に飲まれ

全員が逃げ出し始めた、それを見ていたガリイは、また笑う嘲笑う

「あらあら、一流の錬金術が聞いて呆れますよお?それにさつき言っただけですけどねえ♪結果は同じだって♪」

「まあ、いいですよお?逃げてくれた方がガリイちゃんは楽しいですからあ♪」

自動人形は嘲笑うこれから始まるのは一方的なゲーム蹂躪自らが鬼で奴らが獲物のハンティングゲーム自らの創造主マスターずらをした人間たちに対する当然の報い

「サア、ゲームスタートデスヨオ♪?」

ガリイは、逃げた人間獲物を追う為に動くそれから数十分、人間達の悲鳴が続いた…

「ふう…」

ガリイは息を吐く彼女の周りには干からびた物や首人間から上がなくなつた物が転がっていた

「人数が居たせいで時間がかかっちゃいましたあ:けど思い出も補給出来たし問題なしです♪」

「しかし、これからどうしましょう?」

マスターキャロルがいらない今、自分に存在価値はない、ならばいつそ自分を壊してしまおうか?それとも世界を滅茶苦茶にしてやろうか?それもいいだろう、今の体ならばそれも可能だろう、しかしマスターキャロルがそれを望むだろうか?色々考えてみたが、結論は出ない。

「ん…」

ガリイが考えているとふと足元に1冊の本が落ちていることに気がついた、どうやらさつき片付けた物人間が持っていたらしい、何気なしにガリイはその本を手に取りページをめくる

「ふ〜ん？悪魔、天使、墮天使…ねえ？」

その本にはこの世界にいる異種族の事が事細かく書かれていた

「なるほど…こいつらはこの悪魔やら天使、墮天使に対抗する為にガリイ^私を作ったと…全く反吐が出るわね、私が従うのはキャロル^{マスター}だけだっつーの」

ガリイは足元にある骸の1つを蹴り飛ばす、骸は壁にぶち当たり潰れたトマトのように弾ける

「しかし、ここはガリイがいた世界じゃないという事かしらね？もしガリイがいた世界に悪魔だのがいたならマスターが知らないはずがないし…」

「それに、さっきの奴らは錬金術士を名乗ったのに、アルカ・ノイズを使つてこなかった、どんな低級の錬金術士でも一体くらいは持つていてもおかしくは無いはずなのに…」

今までの不振な点をまとめ、ガリイは自分が今いる世界が前いた世界では無いと思い始めていた
「でも、それが分かったとk」

ドツカーン!!

ガリイが考えをまとめ終わり改めてこれからどうするか考えようとしていると、近くの壁が吹き飛んだ

「ケホツケホツ、何だっけ言うのよ!？」

ガリイが咳き込みながら吹き飛んだ壁の方に注意を向けているとそこから大量の人間らしきものが現れた人間らしきものはガリイを警戒していたがその中から紅髪の女が、ガリイに声をかけてきた

「貴女は…?」

ガリイは心のどこかで面倒事に巻き込まれたと思いきや苦笑した。

これは、決して有り得なかつたはずのお話

1人の悪魔と一体の人形が出会ったことにより始まった物語

この物語がこれからどう進んでいくのかは神様にすら分からない
さあ、神様も知らない光で物語を描こう